

有機農業産地づくり

～人と人を繋ぐ、人を育てる～

有限会社コートヤード
代表取締役 新田美砂子



新田美砂子 (にったみさこ)

農産物プロデューサー

有限会社コートヤード 代表取締役

HP <https://courtyard.co.jp>

オーガニックプロデューサー

法政大学大学院イノベーションマネジメント学科卒(経営管理修士)

城西国際大学経営情報学科 元講師

ワークショップデザイナー

日本野菜ソムリエ協会講師

千葉県「食のちば逸品」審査員 他

(主な事業)

- ・農産物・地域産品の商品企画・開発・販路開拓支援などの支援
- ・ワークショップ企画・運営、農産物のマーケティング研修など

産地づくり事業の主な支援内容

「地域内での有機農業への理解促進」

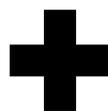
「有機農業従事者 & 面積拡大」

山形県東置賜郡川西町、千葉県成田市、島根県邑南町などを支援

特に、川西町は3年間アドバイザーとして事業全体の支援を行ってきた。

川西町 3年間のオーガニックビレッジ事業結果

有機農業を新たに手掛ける人が7名（水稲、大豆の有機転換）



- 若手農家のネットワークが生まれた
（有機に興味関心がある慣行&有機農業者） → 情報交換、勉強会など
- 行政担当職員のマインドの変化 → 積極的な生産者支援
- 住民の関心が少し高まった → 学校給食・食育活動など

なぜこのような結果になったのか？

● 慣行生産者に有機農業に興味関心をもってもらうための戦略

- ・有機農業への理解促進 → 専門家による説明、有機農業の目的を明確化
- ・有機農産物のニーズを把握 → 「売れる」ことを実際に肌で感じてもらう
- ・栽培技術の疑問を解決 → 栽培圃場見学、地域の有機農業者との対話機会

● 地域住民に有機農業に対して理解を深めてもらうための戦略

- ・一方的な説明でなく、きちんと意図を理解してもらう → 「意見交換会」
- ・持続可能な農業を応援してもらう人を増やす → 「応援隊」「マルシェ」
- ・持続可能な社会に関心のある層を取り込む → 「高校や大学とのコラボ」

有機農業ってよくわからない・・・

理解を深める、思い込みや誤解を解く、共感の機会を創る

一般消費者、実需者、生産者向け産地づくり事業説明&意見交換会を実施



世界と日本の
オーガニック事情



周辺市町村の有機農業者の
事例発表



農業委員会ワークショップ



事業計画についての意見交換会

- ◆一般消費者や食品関連企業等が、新しい試みに協力的になった
- ◆有機栽培をしてみたいという生産者が現れた

地域内農業者同士の接点が意外とない・・・

対話する場を創る、ネットワーク作りの機会を創る

農業のやり方、考え方が違って、共感できる部分や同じ課題が見える化



置賜地域若手生産者のワークショップ((山形県主催)



近隣市町村との生産者、農業関係者、行政担当者とのワークショップ



- ◆若手農業者同士の繋がりが産まれた、広がった
- ◆共通課題が見えて、慣行農業と有機農業者間の垣根が低くなった

有機農産物は作っても売れないのでは？ 売り先がわからない

有機農産物のニーズを体感する機会を創る

スーパーマーケットトレードショー(幕張メッセ)に出展



- ◆生産者がアンケート(ヒアリング)を取ることで、有機農産物のニーズを実感できた
- ◆予想以上にニーズがある事に驚き、複数の生産者が有機米生産に興味を持った

有機栽培は実際よくわからないんだよね。 ちゃんと圃場を見た事ないし・・・

「見る」「聞く」「触れる」体験の機会を創り、理解を深める

- ・置賜農業高校の高校生と地元生産者との合同研修会
- ・地域や近隣市町村の有機大豆・水稻の圃場の見学会
- ・若手農業者、農業関係者を有機JAS検査員として養成



◆具体的なイメージが湧いて、有機大豆の生産を決めた生産者が現われた

有機大豆を作っても、 豆を買う人や食べる人が減少している・・・

未来へ繋がる需要を創出する

山形県立米沢栄養大学の学生と川西町とのコラボで、
伝統野菜「紅大豆」を、若い人達にも食べてもらうための加工品開発



1年間農産物のマーケティングなどを学びながら、商品開発



銀座 山形県アンテナショップ



道の駅米沢

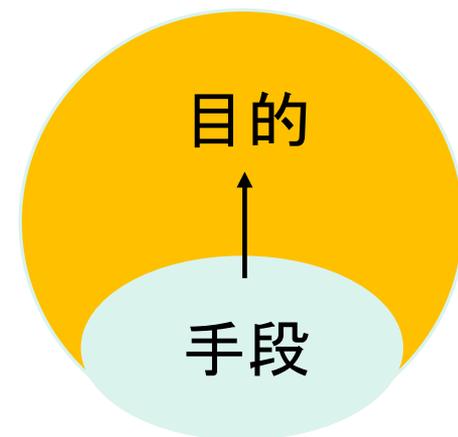
- ◆SDGsに最も関心のある世代に有機農業への興味関心をもってもらえる機会となった
- ◆紅大豆生産者にとって、新たな販路が出来た

有機農業の産地づくりのポイント①

●「目的」の明確化と共有

何のために有機農業をするのか？

共通の目的を共有することで、
対立を防いだり、関係者間の認識に
ズレが生じにくくなる



- * 農業には様々な「手段」がある。
慣行農法、有機農法、自然農法、バイオダイナミクス、BROF、アグロエコロジーなどの
様々な農法は「手段」
- * 農業は手段の違いで対立したり、手段が目的化しがち

有機農業の産地づくりのポイント②

●ゆるく繋がる

新しい形の生産者のネットワーク作り

手法や考え方は多様。

100%皆同じやり方・考え方で統制するのは不可能。

農業者同士が共有できる部分を模索して、ゆるく繋がる工夫をする

従来の堅苦しい形式的な会議ではなく、
ワークショップ(お酒なしの寄合い)などで
忖度なく話し合う機会から共有点を見いだす



有機農業の産地づくりのポイント③

●本質的な課題を解決する

本質的な課題(適応的課題)

興味関心を持つ、
不安や誤解を取り除く
考え方ややり方を変えるきっかけ作り
ネットワーク作りなど

対話(ワークショップ)や実体験

技術的な課題(ノウハウ)

有機栽培技術を理解する
有機JASの仕組みを知る
経営指導、分析、販路の構築など

座学、書籍、動画、研修など

- ◆本質的な課題と、技術的な課題を整理して考える
- ◆自分から有機をやってみようというマインドになるような働きかけ
- ◆本質的な課題を解決した上で、ノウハウを伝えた方が結果が出やすい、
続きやすい(急がば回れ)

有機農業の産地づくりのポイント④

●有機産地づくりは、「農業」×「まちづくり」

◆有機生産者や有機に関心ある人達だけで固まらない

有機に関心のない人達(慣行生産者、実需者、住民)との接点の機会が広がりを産む

* 実需者:加工、中食、外食、小売、食品メーカーなど

◆地域住民の理解と協力を得る機会を創る

地域の生活に直結している農業への理解・協力は不可欠

特に、SDGsの関心度が高い若い世代に対するアプローチが重要

◆地産地消の促進、食文化の継承との接点

学校給食だけでない地産地消の模索

食文化の継承と有機農業の接点作り



市の産業まつりに出展



市民向けイベント

有機農業の産地づくりのポイント⑤

●地域の特色を活かした産地づくり

有機農業の歴史や背景は産地によって異なるので、単に他の地域を模倣するのではなく、その土地の特色を活かす

◆資源(特色)の洗い出し・整理・活用

よそもの(アドバイザー等)、若者などの異なる視点が有効

◆行政担当者だけで推進するのは難しい

生産者、行政まち作り担当者、外部識者との情報交換や協力が必要

有機農業の推進拡大のために

本質的な課題解決なしに、有機農業の推進は難しい



生産者・実需者・消費者すべての「意識変化」が必要不可欠



意識変化には時間・労力がかかる



中長期的な支援の必要性